

一本の糸

闇夜に近い雨の降る日のことだった。復活祭の前日の聖土曜日から、日曜日にかけての夜のことである。雨樋を伝って流れる雨水はザーザーと音をたて、樹木を流れ落ちる雨も、いつ降り止むとも知れず、枝々は雨を含んで、たわわに垂れ下がっていた。

山の小川も轟々と音を立てて流れ、どこかで犬の吠える声がした。遙か山の向こう側であろうか、狭い溪谷を通る夜汽車の喘ぐような汽笛が伝わってきた。

あちこちの家のドアは、とっくに閉まっていた。そこかしこの旅籠でも、すでに静寂が支配していた。

旅籠『白鳥屋』ではたった今、お客たちの最後の客が立ち去った。客が家の外に出るやいなや、内側の明かりも消され、ドアがガタゴトという物音と共に閉じられた。

『おやすみなさい、ブレーマーさん』と、最後のお客に呼び掛けたのは、眠そうな目をした給仕女だった。仕事から開放されたからか、かなり優しい言葉だった。今や一人ぼっちの彼は、ほろ酔い気分で意識も定かではなく、道路に立っていた。小さな痩せた男で、鳥のような顔付きと瞬く細い目をしていて。

男はそろそろと家路を辿り始めた。雨足は滝のような豪雨になっていたが、しかし彼は傘を広げるでもなく、むしろわが身の杖代わりにして身体を支えていた。というのも、今日の家路はいつになく難儀なものに思えた。善良なブレーマー氏は、それでも第三の足の助けで、何とかこの難儀さを克服したいと望んでいた。

ゆっくりとしてはいたが、どうやらこうやら前進することが出来た。上り下りのある道路を既になんかなり進んだ時、彼は不安に囚われて立ち止まった。

まさしくまるで自分のすぐ前を、大きな黒い人物が滑るように通り過ぎたみたいに、まるで何か金属物が一瞬間、鈍いきらめきを放ち、まるで逃げ去っていく足音が、雨に濡れた舗石で反響したように、彼には思えた。嫌な感情がブレーマーを襲い、彼は立ち止まった。

だが神経を張りつめ、この年老いた男はじっと聞き耳を立てたものの、もはや何も見えず何も聞こえなかった。結局、彼は自分自身に恥じ入った。というのも、今日は『白鳥屋』のルッテンベルガーが、普段よりずっとおいしい味だったことを、思い出したからである。

こう認識すると、ちょうど今、遠くから夜警の歌声の響きも聞こえてきたので、彼は再び勇気を揮い起こした。というのも、彼はこう思ったのだ。『おまえは酔っているから、幻を見ることも有り得る。だがしかし、そいつが錯覚でなかったにしても、声の届く距離に、あのノッポのペーターが、確かにちゃんとそこに居るではないか。』

こんな風に考えて、だから老紳士は気持ちを落ち着かせ、ゆっくりと残りの帰り道に戻った。そして終に玄関の鍵穴に鍵を差し込み、その後間もなく、蹣跚めきながら階段を上がって行った。

そして、心から安堵の吐息をもらすと、妻の部屋から満足しきった寝息が聞こえてきた。この寝息で、あいつはぐっすり寝てるなど、ブレーマーは自分で納得した。

安心しつつそう納得した後、ブレーマー氏は自分の寝室に入り、15 分後にはベッドに横たわった。

夜のトイレに立つにも、明かりなど全然必要なかった。一方、衣類掛けの雨に濡れた上着からは、ゆっくりと雫が滴り落ちていたが、ブレーマー氏の瞼は閉じていた----だがしかし、長くは続かなかった。

『みなさん方、よろしいでしょうか。
鐘の音も 11 時を打ちました。
火の元や灯りに注意しましょう。
そうして---- ---- ----』

ノッポのペーターの声は、それ以上続かなかった。この普通と違う声の中断で、家に帰り着き、たった今、まさに眠り込み始めていたブレーマーは、まどろみから再び目覚めた。

そうして、今又しても、何か奇妙なものに出会った。部屋が、円を描きながら彼と共に回転した。そして幾筋かの閃光が、夜の闇に包まれた部屋の中を飛び抜けた。しかもこの閃光は、落ちつかぬげに揺れ動いた。そして一条の光の帯が、暗闇を突き破った。細長い、ちらとも動かぬ光の筋が、窓ガラスの中央を貫いた。窓枠のすぐ横を上から下へと。ブレーマー氏のまばたく細い目は、それを見つめた。しかしその間、耳には何か人の走る足音、バタバタという音、ひそひそと囁く人声も聞こえてきた。それから----か細い、何とも言えぬ音声も聞こえた。

それは息も絶えだえの叫び声だったのか？それとも苦しみ声？うめき声だったのか？---- ---- ----

老人の背筋に、戦慄が忍び寄ってきた。起き上がって、道路へ、あるいは窓辺へだけでも駆け寄ることを、彼は一瞬たりとも考えなかった。いや、とんでもない。かろうじて、何度か目を開けたり閉じたりしただけだった。自分が目覚めて居るのだと納得するために。それから、彼は掛け布団を耳の上まで引き寄せた。そして----15 分後には、夫人と同じように、大きないびき声をかきつつ眠り込んでいた。

こんなことで、ブレーマー氏を臆病者と嘲るのは、出来ない相談だろう。確かに出来ない----勇氣は当たり前、だって敏捷で力にあふれ、動きたくてうずうずする年齢を、彼ははるかに越えていた。ブレーマー氏は 59 歳だった。それに加え、今日は『白鳥屋』のルッテンベルガーを、少々飲み過ぎてもいたのだから。

熟睡し、何も知らず眠りながら、ブレーマー氏のその夜は過ぎた。一連の別の長い夜が、以後続くことになるだろうとは、知る由もなかった。まるで最悪の敵を相手にするように、眠れぬ日を過ごすことになる夜が。

* * * * *

翌朝、ブレーマー夫妻が丁度朝食のテーブルに着いた時、召使いの婆やドール

が、恐怖で顔を青白くさせて駆け込んでくるなり、大声を上げた。『奥様、奥様、大変です、まあ考えても御覧なさい。あのペーターが殺されました。』

『ペーターだって、あのノッポのペーターが？』と、ブレーマー夫人は騒々しく応じた。一方、夫はだらりと垂らした手から、パイプをそろりと滑り落とした。

誰もそれに気付かなかった。多分それを起こした当事者本人さえも。というのも、彼は今、妻同様じっと耳をそばだてていた----婆やのドールはただ----話し続けるばかりだった----彼女が話したすべてが、昨夜起きた恐ろしい事件についてだった。ドールの報告を要約すれば、次の通り。まだ夜明け前に、近くの鉱山から戻ってきた鉱夫たちが、ノッポのペーター、本当はペーター・モールを、上水道の配水管の下で発見した。ペーターはすでに冷たく、硬直していた。体のどことして傷は一つもなかったが、やはり後頭部に小さな瘤が一つあった。

ペーターの衣服は、夥しい路上の泥で覆われていた。だとすると、彼は発見された隅っこ、雨に濡れていない道路の片隅で、こと切れたのではないように思われた。いつもその身につけていた携帯品は、何一つ失われていなかった。そんな値打ちのない物のために、一体誰が、人の命を奪ったりするだろうか？

角笛は、腰の色あせた緑のバンドに垂れ下がっていた。左手は、ほこ槍をしっかりと握りしめていた。そして右手も、何かを、滑らかに磨かれた黄褐色のごく小さい木切れをしっかりと掴んでいた。

この木片を最初に発見したのは、鉱夫の一人が迎えに行き、連れてきた医者だった。二番目の鉱夫は、駐在所の本部に走り、他の鉱夫たちは死体を見張っていた。警察の人々が到着してようやく、哀れなペーターは更に詳しく調べられた。それから近くの警察詰め所へ運ばれた。ドールが肉屋へ出かけたときも、ペーターはまだそこに横たわっていた。町の大半の人々が、詰め所の前に集まり、お互いこの殺人事件の原因に関して、あれこれと推測し合っていた。

その不気味な報らせは、まるで爆弾のように老夫婦の快適な部屋に届いた。二人は今、別々の理由から朝食を取るのを忘れていた。ブレーマー夫人は、この事件で目の前が殆ど真っ暗になったようだった。ペーター・モールのような、勇敢で真面目に義務を果たす人間が、かくも屈辱的な死を迎えねばならなかったということは、夫人の心を痛ませた。実直なブレーマーにとっても、それは気の毒でならぬことだったが、しかし更に別の考えが彼の頭を占めていた。

上水道の配水管の下で、殺害されたペーターは発見されていた----彼が最後の歌を歌っていた場所から、たっぷり 10 分は離れた所で。その歌は不意に途切れ、その後何か人の走る足音、バタバタという音が聞こえ、続いて、か細い何とも言えぬ音声。それは息も絶えだえの叫び声だったか、あるいは苦しみ声であったかもしれない----それとも----うめき声----死のうめき声だったか----

婆やドールの最初の言葉を聞くと、電光石火のごとくたちまち、昨夜の出来事の記憶が、再び老紳士の胸に浮かび上がってきた。その時まで決して考えもしなかった記憶が。そしてドールが長い報告をついに終わると----ブレーマーは自分の気持ちを抑えきれず、こう尋ねた。『そもそもペーターは本当に、上水道の下で発見されたんですか？』二人の女性は、疑いを差し挟む彼を目を大きく見開いてじっと見つめた。

『そうです。一体どうして、そのことが信じられないんですか？ひょっとして、又もあなたは、もっと詳しく知っているとおっしゃりたいの』と、少々興奮気味の夫人は、不機嫌そうに夫を叱りとばした。するとドールは風変わりな微笑みを見せたが、自分の言葉の正しさを疑われ、感情を害されたようだった。

ブレーマー氏はそれ以上、言葉を出さなかった。

ゆっくりと立ち上がりパイプを拾い上げると、そこを立ち去り自分の小部屋に入った。

まだ教会に出かける時間ではなかった。まだ半時間ほど、今日発見された出来事について、あれこれ考える時間があった。それに昨夜、自分が認めていたことについても。

しかし----一体、本当に何かを認めていたのだろうか？そして----もしそうだったとして、実際的な物を認めていたのだろうか？ブレーマーは自分を知っていた----それに彼の活発な想像力のことも----その上、ルッテンベルガーとその作用も知っていた。暗闇の中で、本当に一人の人間が、一人の男が、大きくがっしりした一人の男が、自分の側をかすめ通り過ぎるのを見たとき、完全な確信を持って断定するのは不可能だった。思い違いはたやすい。内でも外でも霧が立ち籠めていれば。また内でも外でも、暗い闇が支配していれば。しかし、想像力が活発過ぎる位働いたからといって、辺り一面黒づくめの大氣中に、それよりずっと黒っぽい人間の影絵を作り上げるというのは、やはり奇妙だ。

自分の知覚が本当なのか疑いはあるものの、ブレーマーは引き続き、昨夜の現象について考えない訳にはいかない。目の前に明確な形が見える。鈍い微かな光、昨夜一瞬間、その人物の傍らで輝いた閃きを、再び目にする。そして逃げ去っていく靴底が、雨に濡れた舗石でぴちゃぴちゃと響くのを、再び耳にする。それから、人影が側を掠め過ぎたとき生じる空気の流れも、感じ取れる。

そして何度も何度も、彼は頭を振る。自分の感覚と記憶は信用できないものか、あるいは信じていいものか、決めかねている。

しかし当然だが----昨夜の人影は、殺人と何か関係あるのだろうか？

ペーターは、幾つかある道路から離れた所で発見された。人影が進んで行った方向とは全く別の所で。そして人影は、町の北側のはずれに姿を消したが、死んだペーターは、町の南側で見つかった。

それでもやはり----やはりペーターは 11 時には、まだ向こうの離れた所で、歌を歌っていた。その最中に邪魔が入り、叫び声で歌は中断した----あるいは力強い手によって半ば窒息させられ、救いを求める叫び声だったのか。だから、かうじて呻き声になることが出来たのか？

ブレーマー氏は、窓の下の不気味なバタバタという物音、人の走る足音、ひそひそと囁く人声を考えた。それを聞いたのだ、そして額の汗を拭いた。一体、これらはすべて酔いと夢に過ぎなかったのか？多分自分が知覚したことを、届け出るべきだろうか？しかしその時、彼は既に上役の皮肉な笑い顔を思い浮かべる。上役は、彼を空想好きな男だと見ていたし、それをブレーマーは知っていた。彼は既に何度となく、ルッテンベルガーやその他アルコール類に対して注意されて

いた。ヒーフラーというのが、厳しい上役の名前だったが、既にずっと以前から、ブレーマーを首にしたがっていた。そして、ただ確実な理由を探していた。嘘の、あるいは嘘だとみなされる証言、酩酊、これは首切りの理由になり得るだろう。嫌われ者は、いとも簡単に排除される。もしも、偏見に囚われた上役が、彼を追い払いたいと考えるなら！

しかし、ブレーマーは平穏な仕事が好きだったし、給料は全額必要だった。年金ではまだ満足できなかったろう。

だからまあ早まるまい----話し過ぎるよりは、むしろ黙っていることだ。いずれにせよ、これは確かに警察の仕事だ----殺人に関係する全てを見つけ出すのは----だとしたら、やはり不確かな証言で、何故ヒーフラーの辛辣な言葉に一層景気をつけなきゃならないだろうか？

ブレーマーが正しくても、嫌われ者になる。だってその時には、少なくともしばらくの間、小さい町中で重要人物になるのだから。想像が間違っていれば、物笑いになる。そしてどちらの場合にも、軽蔑を逃れられない。というのも、もしブレーマーが話をすれば、窓の下で誰かが苦境に陥っているのを知っていて----あるいはそう信じられるのに、ベッドで安閑としていたことを、町中の者が知ることになる。。このひとつの臆病な振る舞いのせいで、ブレーマーは後ろ指をさされるだろう。そして更に普段以上に、きっとヒーフラーはそれに配慮しているだろうが、ブレーマーの不明確で、空想的な考えについて語られるだろう。このように考えて、小心な男は、沈黙することを決心した。

ため息をつきながら、ブレーマーは立ち上がり、帽子とステッキを手に取り、自宅を出た。

物思いに沈みながら、彼は通りを眺める。町の中で一番美しい通りである。余所者がここを歩けば、心地よい驚きの眼差しは、古い家並みに釘付けされる。庭に囲まれ互いに聳え立つ家並みだ。年月を経て灰色じみた煉瓦や、黒ずんだ家々の木材は、過ぎ去った数世紀の様式を示している。

そしてこれ等全ての上に、深い青をたたえた空が広がり、巨大な峰々が町を見守っている。山の側面は、黒い針葉樹林で覆われ、頂上は雪の帽子を抱いている。新鮮な楽しい気分で、復活祭の日曜日が始まった。そして夜の雨で、すっかり洗い清められた町には、荘厳ともいえる雰囲気が漂っている。

これは、すっかり取り乱していたブレーマーには、全く馬鹿げたことのように思える。昨夜の振る舞いに満足せず、落ち着かない彼には、陽光や、側を通り過ぎる着飾った人々が気障りなのだ。

それは近くから、また遠方から、厳かな礼拝に出席しにやって来る村人たちだ。無邪気にお喋りしている余所者たちの中には、土地の人間も混じっている。土着の人間はすぐに見分けられるが、それというのも、考え深げにあるいは真面目に、昨夜の事件を論じ合いながら歩いているからである。ブレーマーは歩きながら、彼だけでなく、町全体が興奮しているのに気付いて、かなり気持が落ち着く----だとすれば、彼の動揺が目立つことはないだろう。

警察の建物の前には、数百人の人ばかりがしている。皆、哀れなノッポのペーターを見たがっている。ブレーマーも立ち止まりたかったが、彼の好奇心よりも

強い何かのせいで、通り過ぎざるをえない。彼にはどんな注目であれ、人目を引くことは避けねばならぬように思えるし、いずれにせよ、彼を見れば誰でも、彼が殺人に関係しているに違いないと見るように思われるのである。

『おまえはあれを見ただろう？』と、ゆっくり歩いて行く老人の背後で、力の籠もった声が尋ねる。

心ならずも、彼はぴくっと痙攣した。実際、彼は自分がこの殺人の共犯者のように感じる。

『もちろん見たよ、正確に。ハンマーで打たれ、瘤が出来ていた』と、別の声が答える。そこでブレーマーは怖ず怖ずと、急ぎ足に側を通り過ぎて行く二人を見送る。

『俺たちの中の一人がやったと、お前は考えているんだろう？』この質問を、ブレーマーは更に聞く----彼はこれで考えさせられる。既に教会に入った後も、そのことを相変わらず考え続けている。又、ミサが既に半分終わっていた時も。

ちょうど今、可愛らしい侍者がミサの聖変化の鐘を鳴らし、信者たちは跪いていたが、ブレーマーだけはいつもの所作を忘れ、首を前方に突き出し、両目は一点をじっと見つめ、身動きもせず立っている。

一体、彼は何を見ているのか？

教会の薄暗い側廊、そこでは、色とりどりの、外部から樹木の影に覆われた窓ガラスを通して、ただ一筋の鈍い薄明かりが差し込んでいる。この側廊の一本の隅柱に、ある人物が寄りかかっている。

それは一人の男、大きな、どっしりした体格の男で、不気味な真っ黒の鉱山服を着ている。これは臍氣にわかるに過ぎないが、はっきり見えるには、その辺りが暗すぎる----しかし、この人物が鉱夫だとわかることがひとつあった。ベルトを締めている幅広の銀バックルである。これは、男が動くと、微かな光でも時々キラリと光る。このバックル、それからブレーマーはどうしても目を離すことが出来ない。聖変化の儀式が終わり、人々が再び立ち上がり、彼と隅柱の男の間に邪魔が入ったとき、ようやくブレーマーはその呪縛から解き放たれる。実際、それは呪縛に違いない。しかも不気味なものだ。我々の旧知の友は、額に冷や汗が滲んでいるのに気付くのだから。『馬鹿者、本当に俺はお馬鹿さんだ』と、彼はぶつぶつ呟く。他の者たちは、大声で祈っているというのに。『一体どうして、あれが、あのロイスだったなんて考えるんだろうか？』

どんなに自分自身を叱りつけても、やはり彼は、何度となくロイス・ベルナウアーの方へ目を向けざるをえない。この大きな、華やかな人間は、有能で誇るべき青年として、どこでも評判だし、そのがっしりした姿は、他の者たちと比べても、肩から上が一際高く抜きん出ている。

ミサが終わった。

薫香の煙に満ちた教会から、人々が溢れ出て来る----ブレーマーも通りへ出る。思わず知らず、彼の目は一人の人物を探す。間もなく見つける。それはロイス・ベルナウアーで、教会の他の礼拝者たちより既に遙か前方を歩いている。可愛ら

しい女の子と、冗談を言い合うのが見える。

当然ながら----何故彼は、それが訝しく思えるのだろうか？----当然ながら、ロイスは無邪気で愉快そうだ、いつものように。ロイスは感じのいい鉦山服に身を包み、実際晴れやかでもあり、殆ど上品にさえ見える。

ブレーマーは二人の後を追う。何か特別の意図がある訳ではない。あるいはひょっとして、その行動には意図があるのか？ブレーマーは静かな行動によって、ロイス・ベルナウアーの姿の観察によって、自分を納得させたいのか？つまり、昨夜ロイスを見たことは有り得ない、又まるで豹のように、彼の側を飛び跳ねて行った、がっしりした人影と、あのロイスが同一ではないということ。

老人は、こうして若いカップルの後を追いながら、ロイスが少しびっこを引くのに気付く。普段よりもゆっくりした足どりだ。

だとすれば、例の人影は、いよいよロイスではなかった。昨夜、飛び跳ねて行った男は、まさしく完全な健脚だった。自分の空想癖から逃れられないのに腹を立て、ついに、ブレーマーは廻れ右をすると自宅へ帰る。

家では、老いた、てきぱきとしたドールが、興奮しながら家事を取っている。一方、妻は教会の二度目のミサに留まる。老主人は、考えごとをしながら庭の中をあちこち歩き回る。こんな風に考える----あえて口に出すことはないが----『不安と恐怖の内に、私はお前を朽ちさせた。哀れなペーター！ひょっとしたら、助けることが出来たかもしれないのに。耳元まで布団をひっかぶり、お前の最後の叫びを無駄に終わらせた。おお神様！何度となく、私はこの叫び声を聞くだらう。無益な後悔の念が、いつも湧くだらう、もし---- ---- ----』

ブレーマーはその文章を、最後まで考えることが出来なかった。急いで近づいてくる足音で、落ち着いた表情を見せざるをえなかった。だからその後すぐ、彼は引き釣ったように微笑んで、近づいてくる男にようこそと挨拶した。

それは彼の職場の同僚で、税務署の会計係だった。彼に似た、活発な初老の男で、ブレーマー同様----金銭の合計とか勘定とかとは----少なからぬ別のことにまだ関心があった。ヒーブラーのもとで、彼等二人は受けが良くなかった。彼は、干涸らびた自分の仕事以外には何も知らなかったし、理解しなかった。この受けの悪さで、老年に近づく二人の男は友人になっていた。不愉快な、孤立した立場の彼等は、互いに同情し、注目し合い、好意を抱き合っていた。

『おはよう、マルテンスさん。何の用事でいらっしゃいました？この 2・3 日間の休暇は、結婚されてる娘さんのもとで過ごされるものだと思ってましたが？』少々不自然ながら、こう言葉を出して、それでも実際心の籠もった握手で、ブレーマーは同僚を出迎えた。

旅行に出かけるには、気分がすぐれなかったもので、ここにこうしてやって来たのだとマルテンスは説明した。当然ながら、会話は間もなくペーターの殺人事件のことになった。同僚は、この会話に殆ど口を挟まなかったが、マルテンスはそれに注意を払わなかった。というのも、ブレーマーは多分ちゃんと気付いたが、マルテンスは奇妙なくらい興奮していた。

普段は思慮深い男が、これ程興奮している理由は、それほど気分がすぐれな

ったからだろうか？こうブレーマーは自問し、友人を秘かに観察していた。

殺人について語るにはついに品切れになり、間が生じた。二人はおしゃべり人間ではなく、活発に考え込むタイプだったが、その二人の間に、何か普段と違うものが生じていた。つまり話の種が尽きた。マルテンスは落ち着かず、そわそわと体を動かした。ついに、マルテンスは勢いよく弾みをつけ、自分は絶望的な苦境にあるのだと、同僚の友人に打ち明けた。今では将校になっている息子が、不運にも、賭博の負債を作った。もし、若者の将来を台無しにしたくなければ、数日以内に、とにかく支払いを済ませねばならないのだと。

『それに私が頼れる人は、あなた以外に誰もいないのです。問題の金額は 800 グルデンです。友人のブレーマーさん---私のハンスを助けて下さい---彼は悪くありません、それに決して軽はずみでもなかった。これを教訓に、きっとこれから先、決して二度と軽々しいことはしないでしょう。この心苦しいお金は、出来る限り早いうちに、あなたにお返しします。そのためなら、私と妻は、どんなひもじい思いにも喜んで耐えるでしょう。』それでマルテンスは話を終え、額の汗を拭った。彼は借金に馴れていないことが、その表情から読み取れた。だが、彼以上に心苦しい思いをしたのは、ブレーマーだった。既に、友人が大急ぎで話している間、彼は立ち上がっていた。そしてマルテンスが、不安そうに彼を見つめながら話を終えた時、ブレーマーは歩み寄りその肩に両手を置いた。

『私があなたの友人だというのは、信じてもらえますか？』と、ブレーマーは迫るように尋ねた。

『そうだと信じます』と、相手は答えて白髪頭を垂れた。彼には、ブレーマーが自分を助けることが出来ないのが、今やはっきりとわかった。ブレーマーは溜息をつきながら、話し始めた。『それでは、私のいうことを落ち着いて聞いて下さい。私どもは私の給料で生活しています。給料は全部使います。このことは信じて頂けるでしょう。50 グルデンなら家にあります。更にクレジットでひよっとしたら、200 から 300 位はあなたに用立て出来ます。しかし 800、800 グルデン---そんな大金を私に貸してくれる人は、想像も出来ません。』

『それより少なくては、私の役に立ちません』と、苛立つ様子で椅子から立ち上がり、マルテンスは言った。

『一体、残りの金をどこかで都合できないんですか----』

『どこか別の所で借りるですって？』と、マルテンスは友人の言葉を遮った。『いいですか、私が借金にどっぷり浸っていることを、本当に御存知じゃないのですね？娘のアンナを嫁にやるにも、一文なしで嫁がせる訳にいきませんでした。それに妻は、4 カ月間病気でした。だから、職場から前借りした給料でも不足でした。』

再びマルテンスはぐったりと椅子に腰を下ろし、両手で顔を覆った。一方、ブレーマーは心を動かされて、この健気な男、家族のために大きな犠牲を払った男を見下ろした。

『一体あなたのハンスは、お金をすぐに工面しなければならないんですか？』と、ブレーマーはもう一度尋ねた。

『すぐにも。あの馬鹿者は、私に叱られるのを恐れて、長い間、時間が空しく過ぎるに任せていました。それで来週の水曜日には、もう名誉裁判にかけると脅迫されています。というのも、相手は無慈悲な奴で、プロの賭博師ですから。』

『だったら、私がお金の一部を用立てても、あなたには何の役にも立たないでしょうね？』

『何にもなりません----だって、もしわたしにわからなければ----』マルテンスはその先を続けなかった。青白くなり、一方で紅潮し、しばらくの間、目の前をじっと見つめていた----それから、ゆっくりと手を目の前にかざして立ち上がった。直立不動のしっかりした足で、唇の回りに強情な表情をたたえながら、その場に立った。『あなたの名誉にかけて、約束して下さい。私たちの相談について、一言半句たりとも口外しないことを。』彼はこう言うと、ブレーマーに手を差し出した。

ブレーマーは、自分の手を彼の手の中へ滑り込ませると、人が良さそうに言った。『私の名誉にかけて----ええそうです、安心して下さい。おっしゃる迄もなく、あなたの事件について話すことは、思い付きもしなかったでしょうが。』

『私の事件、まったくその通りです、私の事件にすぎません。だからブレーマーさん、ハンスと私の苦境について、誰にも知られたくありません。あなたの言葉を信じます。あなたの名誉を。』

大急ぎで、興奮して、友人以外の誰も彼の言葉を聞いていないか、燃えるような目付きで、小さな庭を念を入れて探りながら----不安そうな父親は語った。それからもう一度、ブレーマーの手を握ると立ち去った。

老人は、訝しげに、心配そうにマルテンスを見送った。それから腰を下ろした----疲れ果て、疲労困憊だった。

しかしこれはまた何という一日だったろう！まず殺人の知らせ、それから教会での奇妙な印象、そして今、友人を助けることも慰めることもなく、立ち去るままにしなければならなかった。ブレーマーは実際、惨めな気持ちに捉えられていた。

* * * * *

翌朝、彼は再び教会へ出かけた。その時まで、もはや家を立ち去ることはなかった。というのも、のっぽのペーターについて聞いたり、あるいはマルテンスあるいはその静かな、青白い奥さんに出会うのは、彼には余りにも心苦しいことだったろう。

彼が教会の広場を横切ろうとした丁度その時、一台の車に足を止められた。偶然、彼は車の中を覗き込み、文字通り体を反らした。片隅に、身をちじこませ、まるで人や太陽の光を避けるかのように、この車にはマルテンスが座っていた。彼は青白く、やつれて見えた。ブレーマーは憐憫の情に溢れ、思わず声を掛けようとしたが、車はあっという間に側を転がり過ぎた。そこでブレーマーは当惑して、車を見送ただけだった。物思いに沈みながら、彼は教会に足を踏み入れた。マルテンスは明らかに気分が悪いように見えたが、それにも拘わらず、ほんの僅かな時間でも娘の所へ行く気になったのは、何のためだろうか？というのもマルテンスの車の道は、娘の所へ行く道だった。まだ決して機関車の汽笛さえ聞いた

こともない、山々の間の中央に位置する、あの小さな町への道だったのだから？

再び、一夜が過ぎ去っていた。

我々の年老いた友にとって、その以前の夜と同じく、この夜も、何ら元気を回復させることは殆どなかった。

嫌々ながら、彼は職場に赴いた。

ただ、道路を向こうへ渡ればいだけだった。というのも税務署は、彼の家の丁度向かい側に事務所を持っていたのだから。

お天気は、再びどんよりとしていた。だから、道路も飾りっ気のない事務室も、一様に居心地良くなく見えた。

ヒーフラーは既に、小使いにガミガミ言っていた。というのも、窓がまだ開けられていなかったし、鎧戸は無造作に、ちょっとだけめくられていた。そして、テーブルや椅子の上には、埃が我が物顔にのさばっていたのだから。それにひどい登山狂だったヒーフラーは、黴臭い空気には当惑させられた。ヒーフラーはいい意味での登山狂、自然に近づくために、人間を避けることの出来る一人ではなかった。いや、人間を避けたいからこそ、何時間も独りで彷徨い歩く一人だった。ヒーフラーはいつも無愛想で、機嫌が悪かった。だから部下の者たちは、彼の不機嫌さをもはや何とも思わなかった。

ブレーマーはその間仕事着に着替え、かなり上等の上着を、注意深くハンガーに掛けていた。そして袖カバーをつけようとしていたが、その時、丁度金庫を開けていたマルテンスが、叫び声を上げた。

『おやおや、びっくりしますよ。どうしました？』と、ブレーマーは驚いて大声を上げながら、動揺している男に駆け寄った。すると、隣の部屋の敷居にヒーフラーも姿を現わし、ぶつくさ文句を述べた。

『一体、どうしたのですか？』

震える両手で、肘掛け椅子に寄り掛かっていたマルテンスは、何度か痙攣しながら言葉を飲み込み、それからやっと絞り出すように述べた。『あの----金庫が----盗まれました。』

『盗まれたって！』と、それを聞いた二人の口から言葉が返って来た。そしてその後、長時間、部屋の中には不気味な静寂が漂っていた。

不愉快な程ははっきりと、つぐみの鳴き声が聞こえた。近くの庭で囀っていたのだ。また、会計係の呻くような氣息も聞こえた。

そしてその後、ヒーフラーの素っ気ない甲高い声が、人を苦しめるような静寂を断ち切った。

『しばらく職場から退いてもらう前に、マルテンスさん、やはりあなたが思い違いをしていないかどうか、私達は更に確かめようじゃありませんか。』

こう、ヒーフラーは静かに言うと、後ろ手にドアを閉め、ゆっくりと部屋を横切ってきた。マルテンスは震えが止まらず、支えを、あえて手放すことが出来なかった。開いている金庫を、相変わらずじっと見つめ続け、自分の意思で動き出す元気もなかった。

だから彼は、旧友のブレーマーが驚いた目付きで、自分をほんの一瞬、観察していたのに気付くことが出来なかった----ほんの一瞬間だったが、それというのも、その後ブレーマーは顔を背けると、まるで厭わしい考えをきっぱり捨て去りたいかのように、頭を激しく横に振った。ヒーフラーの目は、いつも鋭く、探るようだったが、ブレーマーの動作を見逃さなかった。だが、彼は表情を変えなかった。その時は恐らく、何か特別のことを考えていた訳ではなかった。

今や彼はブレーマーに、こちらへ来るように合図した。そこでブレーマーは、彼と一緒に金庫の前へ歩み寄った。

『一体、何がなくなっているんです？』と、彼はまだ中を覗き込む前に尋ねた。

すると、マルテンスは疲れたように頭をあげた。

『木材納入業者用のお金が入っている、三つの袋です』と、彼は殆ど聞き取れぬ声で答えた。

『それじゃあ、6000 グルデンだ。』

『6000 グルデンです。』

『どの棚から？』

『真ん中の棚からです。』

『調べてみよう。』

今や、ヒーフラーもやはり動揺していた。

彼の少々かすれ気味の声、青ざめた頬がそのことを示していた。

ブレーマーは彼のすぐ横で、金庫の中を覗こうと前方に身を乗り出したが、その時、ヒーフラーの血の気のない顔が見えた。真ん中の棚が空っぽなのも見えた----そしてその後、さらに何かを見た----そして上役の顔が、突然赤みを帯びるのを見た。そして自分が押し退けられるように感じた。ヒーフラーは、金庫の重い扉を閉じていた。そして今、錠をおろそうとしていた。

それは、馬鹿丁寧な仕事ぶりだった。

ヒーフラーが錠をおろし終わるまで、かなり長い時間が必要だった。

そのさい当然ながら、ヒーフラーは二人の役人に背中を向けていた。

彼等に再び向き直った時、ヒーフラーは以前のように青ざめていた。青ざめて

いるが、全く落ち着いていた。

しかし今や、ブレーマーの小さい鳥顔には、前にヒーフラーの顔を覆ったのと同じ赤みが差していた。そして---ブレーマーは落ち着いていなかった。苦しげに深呼吸すると、急いで額の汗を拭った。

ヒーフラーは、彼の興奮について、何も気付かないようだった。落ち着いて金庫の鍵を懷に仕舞うと、相変わらず放心したように目の前をじっと見つめているマルテンスに向かい、殆ど親しげに、こう述べた。『泥棒にやられたのは間違いない。だからあなたには当分、休職を命じなければなりません。家へ帰りなさい。勿論、いつでも家で見つかるようにしていなければなりません。---一体、何故帰宅しないんですか？』---

そう、上役は尋ねざるをえなかった---マルテンスが動かなかったから---しかしそれでも、動いていた。というのも、彼の体全体が熱に浮かされ、心の奥底の、耐え難い苦しい興奮のために、どの筋肉もわなわなと震えていた。

灰色の青白い顔をして、彼の目付きは鈍い光をたたえ、無表情だった。そして苦しげに、藻掻くように胸で息をしていた。

『一体、何故帰宅しないんですか？』と、ヒーフラーは苛々しそうになりながら、もう一度尋ねた。

すると、マルテンスは話そうとした---その時、支えの椅子を離した。彼は右へ、左へ、少しよろけると、何かを探すように両手を伸ばし、ブレーマーの腕の中へ沈み込んだ。

『ほら、友人マルテンスさん、しっかりして下さい』と、小男ブレーマーは、益々重くなる友人の身体を、かろうじて近くの椅子へ引きずりながら嘆いた。ヒーフラーが手伝い、不幸な男を椅子に座らせた。それから彼は助けを呼び寄せるため、急いで部屋を出て行った。

その間、ブレーマーは友人の重い頭を支えていたが、心配そうに彼の上に身を屈めた時、マルテンスの目がぱっと開いた。

刺すような苦痛の色が、目に浮かんでいた。だが、それよりもっと身の毛のよだつことを語ったのは、途方に暮れた男の青ざめた唇だった。

それは、僅か一文章にすぎなかった---しかし怖いくらい意味深長で、健気な、老ブレーマーの血管の血を凝固させんばかりのものだった。

『私には、やはり責任があります。そして他人を共犯者にしてしまいました。』

どもりながら、ただ半分しか聞き取れぬ、しかしそれでも、友人にとって恐ろしい程はっきりと、この不運な男はその言葉を口に出した。そしてもっと言おうとしたが、その時、外の廊下で慌ただしい足音がした。そこでブレーマーの手が、友人の口を塞いだ。

次の瞬間、ヒーフラーと二人の使用人が、部屋の中に立っていた。そして前者は、病人になった役人を、出来るだけ慎重に家まで連れ帰るように命じた。

ブレーマーは友人を二人の使用人に任せたが、しかし自分の帽子を掴んだ----その時、ヒーブラーの手が彼の肩に置かれ、かなり鋭く上役はこう言った。『ブレーマーさん、あなたはここにいて下さい。私があなたの友人に同行します。それからお願いしますが、病人とはできるだけ交際しないように----というのも、彼をそっとしておくのが望ましいことですから。』

こう言うと、ヒーブラーは二人の使用人の後を追った。二人は、マルテンスを連れていくというよりむしろ運びながら----家から連れ出した。たった今、彼が恐ろしいことを体験した家から。

途方に暮れて、ブレーマーは立ち去る者を見送った。それから椅子に沈みこみ、震える両手を膝に置いた。

そんな風にして、ブレーマーはそこに 15 分程座っていたが、身動きしなかった。しかし頭は猛烈に働いていた。目まぐるしく変化する顔の表情から、それが知れた。

ついに立ち上がると、見るところ何の当てもなく、部屋の中を何度も歩き回った。彼の眼差しは緊張していた。彼の内部のすべてが、じっと聞き耳をたて、質問し、何かを探っていた。

『やはり責任があります----やはり責任があります』と、彼はぶつぶつ呟いたが、そう言いつつ頭の中はすっかり混乱しているように見えた。彼はマルテンスの言葉、その責任があることが信じられなかった。何か探すように、彼の視線は、部屋の中の色んな物の上を彷徨った。白い床の上、灰色に塗られた壁の上、僅かしかない箱や机や椅子の上を。それらには薄い埃が積もっていた。

金庫の部屋には、出口が二つあった。ひとつは廊下に、二番目は上役の部屋に通じていた。二番目の出口のすぐ横に、机があった。とても質素な机で、そのうわ板には、油布がかぶさっていた。いつも空いている机で、使用されていなかった----今日も空席で、まだ誰もそれに近づいた形跡はなかったし、まだ何者もこれを使っていなかった。まだ邪魔されず、机に積もった埃が、それを証していた。ヨゼフは(これが小使の名前だった)拭き掃除を忘れていた。

この埃をかぶったうわ板に、老ブレーマは、今や熱心に身を屈める。

一体、彼は何を見ているのか？

うわ板に積もった埃の濃さが、一様ではない。

うわ板の前方、端の近くでは、あちこちで積んでいる埃が、他の所と比べると少々黒っぽく見える。それは、机のうわ板の埃が他のどこより薄っぽいからだ。そこには、ほぼ同じ形の 3 つの楕円形状の所がある。それはまるで、同じ形の柔らかい物体が、机の上で休息したかのように見える。そして物体によって残された、この形跡のすぐ横に、もうひとつの痕跡が認められる。4 つの小さな、黒っぽい斑点で、ほぼ円の形に配置され、最初と最後の斑点は 2 つの線になっている。2 つの線はなだらかに動いた後、ローマ数字の **v** の字の、角でひとつになり、2 つの線が出会う所には、再び、黒ずんだ幅広の斑点がある。

ブレーマーは、暫くこの印をじっと見下ろしている。それから自分の机に歩いていくと、一枚の紙と鉛筆を取ってくる。そして大急ぎの略記だが、今の所まだ説明のつかぬ、斑点の概略をスケッチする。

『これが何か役立つなんて、わかりはしない』と、彼は呟きながら、謎めいたスケッチをポケットにしまう----それからハンカチで、スケッチした原物を拭き消す。他人がこの原物を見る必要はないのだから。

老空想家は、かなり大っぴらに上役は彼をそう呼んでいるが、この様にした後、もう一度部屋を見渡す。それは大きな、飾りも何もない部屋である。4つの壁のひとつ、丁度窓の真向かいの壁に、廊下へのドアがある。そのドアの右手の隅に、金庫が置かれている。左手にストーブ、その横に古ぼけた書類棚、その棚に続いて、ヒーフラーの部屋へ通じるドアがあり、このドアの左側に例の机が置かれている。泥棒は金庫から奪った金袋を、逃亡する迄そこに預けていたのか？では何故そこに？部屋の中で、金庫から一番離れた所に？ヒーフラーの部屋に通じる、ドアのすぐ横に？その部屋からは、小個室への抜け道があった。その個室は、まさしくヒーフラーの官舎の一部だった。

上役は盗難について、同僚の職員たちより既にずっと前から知っていたのではなかろうか？

しかし、マルテンスは確かにこう言っていた。『私には、やはり責任があります。そして他人を共犯者にしてしまいました。』----だが、マルテンスとヒーフラーには、お互い関わり合うものは何もない。

熱に浮かれた様に働いている、ブレーマーの思考の糸が綻んだ。彼は自分自身がとても不確かに感じられる。秘かになされた自分の推理が、すべて信用できなくなる。

一時間前まで彼を煩わせていたもの、つまり殺されたペーターに関する考えが、最新の事件で落ち込んだ興奮のあまり、忘れられている。

『最新のもの』----と、彼は考え、それから縮み上がる。『最新のものか？』そうだ、一体これは本当により新しいものだろうか、このたった今、発見された犯罪は？これはもしや、既にずっと前に、あるいは、あの哀れなペーターが最後の溜息をついたのと、丁度同じ時刻に起きたのではないのか？

ブレーマーの脳髓を通して、嵐が、澄み渡るような嵐が吹き抜ける。----

突然ブレーマーには、事がすっかり明らかになる。ペーターは実際彼の、又この窓の下で死んだということが。そして聖土曜日の夜、彼が酒の酔いや、夢や空想力に欺かれた訳でもないことが。

ただ一度眺めてみて、それが彼にはわかった。道路上へ投げられた一瞥によって。道路を眺めながら、何年となくこの家で働いていて、奇妙にも初めて彼の注意を引いたことがあった。彼の事務所の部屋の窓は、彼の寝室の丁度真向かいにあったこと。又彼のベッドからは、こちら側で起きたことが全て見えること。そして彼は----殺人の夜に、点になって散らつく光と並び、長くて、明るい、ちらとも動かぬ光線を見ていなかっただろうか？

ヨゼフ、あの怠け者ヨゼフは、窓のシャッターの閉め方が悪かった。それで、小さな隙間から光が漏れていた。泥棒の仕事を、照らし出していた明かりが。ペーターもきっとその光に誘われて、こちらへ来たのだ。あの誠実な男は、明かりが何の目的なのか解明しようとした。『見張り役』の死の一撃が、それを永久に妨げたのだ。

この様に考えて----今や、ブレーマーには事が飲み込めた。

* * * * *

町全体が興奮していた。

ほんの数日間で、2つの犯罪が行われた。普段は、平和な懷に抱かれた町で。それは前代未聞だった。人をぞっとさせうることだった----だがいずれにしろ、これから暫くの間、話しの種に事欠くことはなかった。

復活祭の後の火曜日、午後、あのノッポのペーターが埋葬されることになった。彼は夜警になる前、鉦夫だった。だから鉦山の人々は、彼に荘重な葬儀をと考えていた。

町の大半が、葬儀に自発的に参列した。鉦山局や町内代表のお偉方が、素晴らしく古い教区教会の最前列に陣取っていた。そして、鉦夫たちに担れたペーターが運ばれてきて、弔いの歌の音が、まるで物憂い黒い蛾のように教会の中を響き漂うと、出席者のひとりとして身動きしなかった。というのも、町の平和と安全が甚だしく犯されたという考えが、暗鬱に不気味に、出席者全員の回りを吹き抜けていたからである。

まるで夜の影のように、6人の運び手が棺の周りを取り囲んでいた。細長い、ゴシック風の窓から差し込む淡い光と、黒い鉦山服が、彼等の顔を不気味に青白く浮かび上がらせた。そして、彼等の中で一番青白いのは、あのロイス・ベルナウアーのように思われた。いつもは大きく、樅の木のようにすらりとしていたのに、今日の彼はかなり小さくなったように見えた。それほど、身を屈めて彼はそこに立っていた。

老ブレーマーには、少なくともそんな風に思われた----

身を縮めるように、というのも寒気がしたからだ。彼は教会の脇の椅子に座り、そしてあの若者から目を離すことが出来なかった。一度、彼は完全にぴくりと縮みあがった。それは、ロイスが突然棺から数歩後退りした時である。明らかに、ある苦痛からやむなく近くの柱に身をもたせ掛けたのである。その時、彼は足を自分へ引き寄せ、唇を食いしばった。

彼は教会の椅子のすぐ下に立っていた。ブレーマーも椅子に座っていたから、ロイスが震えているのを、ちゃんと正確に認めることが出来た。

ブレーマーは頭を横に振った。

ところで今日は、誰もが神経質になっていた。というのも、又しても人々はこそそ話しをしながら、互いにあれこれを伝え合い、頭を横に振っていた。

ただ一人だけが平静だった。身動きせず、大きな明るい目を祭壇の何か装飾品に向けたまま座っていた。

それは、冷血漢ヒーフラーだった。恐らく、生涯まだ一度たりとも、何かを自分の身近に近付けさせることはなかったろう----心が動かされる位、身近に。

今日でさえ、マルテンスの家で悲嘆にくれる男を傍観した後、落ち着いて平然と、いつもの様に事務所に戻って来なかったか。そしてそこで、治安当局のお偉方に冷静な声で、起きた事件を説明しなかったか？ブレーマーもそれに立ち会わねばならなかった。というのも盗難発見の際、確かに居合わせていたのだから。犯人に関する上役の推測は、全く不明確だった----というのも、この点について、ヒーフラーは言い難いほど用心深い言葉を発したのだから。ただ二つのことだけは、何度となく彼は指摘した。まず第一に、実行犯は数名だったに違いないということ。何故なら、手助けする者がいなければ、一人で重い数個の金袋を、願ってもない位あれほど早く運び出せなかっただろうと。そして第二に、犯行は復活祭の月曜から火曜にかけての夜、行われたに違いないということ。というのも、それ以前の夜であれば、全てに油断のない飼い犬フィードーが、ほかの時はいざ知らず、金庫室に通じる廊下に寝ていた。だから、あの夜には確かに、誰もそこに侵入することは出来なかった。ただ昨夜は、フィードーは自分と家の外で過ごしたが、それは、山で自分と飼い犬を驚かせた暴風雨のせいで、両名はアルムの宿屋に泊まる羽目になったからだ。

これが上役の陳述だった。彼の会計係については、一言も悪口を述べなかった。真面目で、静かな男、勿論不運につきまとわれた男として叙述した。

金庫の鍵についても、話された。そして金庫が開けられた際、僅かでも無理矢理こじ開けられた跡はなかったと。また特に落ち着いて、彼は金庫の鍵を保管したことは一度もない事情が示された。何故なら鍵は二つあったが、前々からマルテンスが管理していたからと。

実際、ヒーフラーは話しながら本当に落ち着いていた。そしてマルテンスから取り上げた鍵を、司法のお偉方に引き渡した。彼等は全くヒーフラーの知り合いばかりだったが、礼儀正しく家の前まで見送ると----再び仕事部屋に戻り、まさしくそこで、まるで些細なことも起きなかったように、静かに仕事を続けた。

そして今、今彼は、あちらの教会の椅子に座っていた。そして----ブレーマーには少なくともそう思えたが、心配そうな眼差しで、何度もあのロイスを眺めていた。

* * * * *

数週間が過ぎ去っていた。

ノッポのペーターと、彼の恐ろしい秘密に満ちた結末は、相変わらず町の話の材料だった。そしてそれに劣らず、税務署金庫からの強奪についても語られた。

噴水の側の菩提樹は、黄葉した葉を振るい落とし、リンボクは青く色づき始めた。秋は、山国へ早めにやって来る。晩夏の最後の暑い日々が、冬の果実を熟れさせていた。谷に流れ落ちる溪流は、足を早めていた。そして繁みや森では、ホウジロがほんの時折、素朴な歌を囀っていた。

森の鳥たちと共に、夏の客達も静かになった山間の町から引きあげていた。

だがしかし、今回は町の様子が違った。普段とすっかり違った静けさだった。騒々しい余所者達が立ち去ると、町は心地よい静寂に帰る----だが今、到る所で支配していたのは、不気味な静寂だった。というのも、二つの犯罪が----罪を贖われないままだったから。

あらゆる捜査にもかかわらず、殺人犯も----泥棒も発見されていなかった。そして両者はひょっとすると、自分たちの中に留まっているかもしれぬという考えが、正直な人々を不安に、不愉快にさせ、恐怖させたのである。

* * * * *

治安当局が如何に熱心に犯人を搜索し、相変わらず彼等を追跡しても、犯罪者達を指し示す僅かな痕跡すら見つけるのは、やはりうまく行かなかった。そうだ、殺人の動機についてまだ予想すら持てなかった。更に盗まれた 6000 グルデンがどの方向に運ばれたかの予想も。それはまさしく新鑄造のお金だったが、街の近辺や遠方でも、今年の年号を持つ 1 グルデンたりとも支出されていなかった。この事情は、盗まれた総額が、遠くへ持ち去られたという推測へ導いた。にもかかわらず、土着の者がそれを盗んだに違いなかった。土地の仕事をし、また町のことに良く通じている何者かが。というのも、盗みを危険に晒すあらゆる障害なしに、また何等かの痕跡を残すことなく、大胆な窃盗が起きていたのだから。そこで金庫にごく身近である者が、盗みを行ったと推量さえ出来たのである。

その際マルテンスが考えられたのは、ごく自然だった。一人の人間の正直さはいかにも容易く忘れられる！彼の負債について、かくも身近にある誘惑について、又あり得ることだが、マルテンスがこの誘惑に屈したことについて、こそこそと噂された。

この推測を最初に口にしたのは誰なのか、何者も知らなかったが、人々はその話を更に広げていった。終にはかなり開けっ広げに、何か自明のこのように、会計係の罪について語った。彼の家で詳細な搜索が行われた。彼はその事を何も知らなかった。というのも、酷い熱にうなされ、病床に横たわっていたのだから。裁判所のお偉方は、マルテンスの妻に住居を隈なく案内されたが、彼女は大層狂乱状態だったし、反抗的で絶望している女のように見えたと主張した。

この観察に基づいて、会計係が住まっている家は密かに監視された。そうではあったが、不幸な男の譚言も家の搜索も、更に立ち入って調査する手掛かりを与えることはなかった。私服刑事が向かい側にある旅籠に宿泊させられた。刑事はある夕方、背の高い、痩せた男がマルテンスの家へ入っていくのを見た。そして会計係の青白い妻が、そのすぐ後、見知らぬ男と病人の部屋の窓辺に歩み寄り、活発に彼と話すのを見た。それからその見知らぬ男は、彼女に一枚の紙切れを渡した。彼女は長くそれを眺めていたが、多分手紙だったろう、重要な手紙だった。というのも、彼女はそれを読んだ時、ショックの余り激しく泣いた。それから再び、紙切れをその見知らぬ男に戻した。いずれにしろ、賢いと言うより進んで事をなす気性の警官は、この瞬間立ち聞きのを場所を離れ、近くの警察詰め所に気付いたことの報告に向かった。

そこでは彼の報告が殆ど終わらないうちに、信頼出来る男が一人、彼に同行させ

られた。二人で、疑わしい余所者の行動を更に監視するためだった。彼が家を立ち去った時には、後をつけて、場合によっては逮捕することとなった。

急いで彼等は現場に赴いた---彼等はすぐに分かったが、遅すぎた。というのも、マルテンスの妻はたった今、薬局へ行くため小瓶を持って家から出て来た。余所者は既に彼女から立ち去っていた。ドアの闕に座っていた小さな男の子の話では、大男がほんの先程、マルテンスの妻に導かれて、その家の背後にある小庭を通ったこと、又、その男はそこから戸外へ通じる小門が閉まっているのが分かった時、垣根をよじ登ったと言うことだった。

疑わしいことだ。短い熟慮の後、二人の男は近くの駅へ急いだ。そこでひょっとすると、彼等はその余所者を見つけるだろうと思ったし、秘密警察捜査官ならきっと彼に見覚えがあるだろう。

窓口の職員は、ほんの僅かの人物にだけ切符を発行していた。大きな痩せた男はその中にいなかった。しかしそれは、彼がそれにも拘わらず列車に座っていることを排除しなかった。彼が往復切符を持っていたことも、確かにあり得た---或いは列車内で切符を買うことも出来た。

二人は次の駅に電報を打った後、嫌々ながら引き返した。電報の中味はこうだった。『<某駅>から来た、灰色の衣服で大きな痩せた男が、列車内にいる場合には、留め置くべし。』

その間、一台の古い四輪馬車が、山間道路を大急ぎで北へ向かっていた。御者は馬を鞭打っていた。彼は恐らく、出来るだけ速く町の区域から出るように注文されていた。

馬車には一人の男が座っていた。彼は大柄に違いなかった。彼は痩せていた。彼の顔は青白く、目は落ち着きがなかった。眼差しは時折、右へ左へ向かった。その男はまるで何かを恐れているようだった。彼は、良心に疾しいところがある者のように見えた。この男は灰色の服を着ていた。

* * * * *

警官と秘密警察捜査官が駅を去ったすぐ後に、ある列車が停車場に入ってきた。それはウイーンの急行列車だった。

唯一人の乗客が列車から降り立った。

今、この古い山間の町は他郷の者には何の魅力もなかった。

この一人の鳥顔の乗客は、正しく苦悩に満ちているように見えた。彼の眼は、普段よりずっと落ち着かなげに瞬いた。そして時々溜息をつき、ゆっくりと町に向かって歩いて行った。

それは我々の古い友、ブレーマーだった。彼は何年振りだろうか、又しても首都への旅行を企てていた。---彼のますます弱まる視力のためにと、人々に語っていたが、彼の妻に対しても、旅行の理由をそう説明していた。しかし彼は医者には行かず、ただある兵舎で、一人の若い将校を訪ねていた。

彼の父親が如何に重病であるか、そしてその他、更に彼の家で起きていた全てのことを、ハンス・マルテンスは何も知らなかった。ブレーマーは、ハンスの親戚達が、多分重大な理由から彼に秘密にしていたことを伝える資格が、自分にはないと感じていた。何しろ彼は、そのような伝達が如何なる結果をもたらすかについて、分からなかったからである。

まさしく重苦しい気持で、彼は若者に別れを告げたが、少なからぬ重苦しい気持を抱いて、彼は立ち去った。

『でもやはりそうか----でもやはりそうか!』と、彼は兵舎を去る間、ぶつぶつと呟いた。彼は友人の実直さを見損なっていた。そしてこの『やはりそうか』----が旅行中彼にずっと付きまとった。ブレーマーは、ウイーンで捜した真相を掴むまで、マルテンスが空想上の罪を自分に帰せているとの考えに固執していた----今彼は、この罪の存在を信じ始めていた----というのも、何処でも最早信用貸しを見つけられなかった、哀れなマルテンスは、息子に大きな額の金を送ることが出来ていた----そして同時期に、彼に任せられた金庫が盗難に遭ったのである。

マルテンスの差し迫ったお願いは芝居だったのか? しかし何のためにこの危険なお芝居? 彼は既にお金を手に入れていたか----あるいは不誠実な方法で金を得ることを既に考えていたのに?

そして誰が彼の共犯者だったのか? ヒーフラー? 金庫の前で当時、耐え難いほど顔を赤らめていたが? 彼は金庫の中に小さな、たった一つの物を発見し拾いあげた。老ブレーマーが実際の視力よりも、ずっとずっと悪い眼をしていることを信じながら? ----

老人には、生じた出来事がますます解きがたく思われる。何を信じ、何を推測していいのか、彼には決して分からない。彼にただ分かるのは、今でも彼の心の中では、まだマルテンスの実直さを確信していること、しかし彼の理性はこの誓いを拒否していることだった。そして分かっているのは、ヒーフラーを悪人と見做すにしても、彼を不当に扱わないことだ。

かくして彼は、自分が沈黙し、探索し、嗅ぎつけるという罰を課されているのを知る。彼が再び落ち着くことになれば、彼自身が、罪ある者あるいは罪ある者たちの発見に成功するに違いない。マルテンスがその中にいれば、正義が彼をも急襲するかも知れぬ。彼がその中にいなければ、誰も彼をこの事件に関連づけることにはならぬだろう。彼がそれを阻止出来る限りは。 ---- ----

これがその考え、ブレーマーの決心である。

* * * * *

首都から帰還後の朝、彼はいつものように、静かに又熱心に働きながら仕事机に座っている。その時ヒーフラーが、一包みの書類を持って彼の所へやって来る。まさしく親しげに----ヒーフラーは今やいつも親しい----彼はブレーマーとその書類の決裁について話し、ヨゼフが慌てて部屋に入ってくると、何気なく振り向く。

『さてと、何かあるんですか?』と、ヒーフラーは少し鋭く尋ね、苛つきながら、持っている鉛筆で机の角を叩く。

上役が最初の部屋にいるのに思い当たらなかったヨゼフは、驚いて更に二三歩、前のめりに躓く。それから突然大声を出す。『私は----私はブレーマーさんに、丁度ロイス・ベルナウアーの弔いの鐘が鳴らされているのを話したかったです。』

ブレーマーは驚いて眼を上げる。それは何なのか？

ヒーフラーは蠟のように蒼白になる----そして手に持つ鉛筆がポキッと大きな音を立てる。というのも、指がその木を激しく握り締めたので、真ん中で折れたのだ。そして今、今やヒーフラーはゆっくりと部屋から出て行く。彼は何処へ行きたいのか、よく分からないに違いない。というのも、真っ直ぐドアに向かって行かず----壁際に着くと、盲人のように壁をとんとんと叩き続ける。今や彼は、明らかに鉛の如く重くなった両足にも拘わらず、出口への道を更に辿った。そして後ろ手にドアを閉める。

どうして気高いヒーフラーは、哀れな鉱山夫が死んだ時、心の最深部に到るまで驚かざるを得なかったのか？

『出て行って下さい。----私を一人にして下さい』と、ブレーマーは彼の考えから目覚めながら、普段より遙かに柔らかくない声で召使いに言う。

ヨゼフは出て行く。彼はその際、頭を振る。今や職場の連中は皆、とても変だ。

しかしブレーマーも間もなく彼の後についていく。彼は先程、一寸した奇妙な振る舞いをまだ実行していた。電撃的に胸のうちに浮かび出た靈感に従って、上衣のポケットに手を入れ、しばしば無用だと思われていたスケッチ、数週間前、埃にまみれた机で描いたスケッチを眼の前に広げた----指を広げた手を、四つの小さな斑点を示す場所に置いた。これ等の斑点は動かされた線に続き、ほぼローマ数字 V を形作りながら、もっと大きな斑点で一つになっていた。今ブレーマーの手はその上で休んだ。全ての斑点の輪郭が彼の手で塞がれた----ただ彼の人差し指のための輪郭はなかった。『ぴったりだ』と、ブレーマーは独り呟き、大きく息を吸いながら、『三つの袋は机に乗っていた----そしてこの痕跡はロイスの手で出来た----人指し指が欠けているロイスの。』 ---- ---- ----

ブレーマーは彼のスケッチを再び自分の手元に置き、今や次のことを推測する。あのロイス・ベルナウアーはペーターの殺人者で、金庫を奪った者の援助者だ。彼等はあの哀れなペーターを殺したくはなかっただろう、しかし----彼は、復活祭の土曜日の夜に起きた、彼等の犯罪を看破した。そこで彼等の力の強い方が、ペーターを黙らせた。それから彼等は、実行現場から遙か遠方へ彼を運んだ。その犯行は、殺人と結びつけられなかったので、ようやく復活祭の月曜の夜に実行されたと見做された。

* * * * *

しかし何も起きなかった----町の上にあった陰鬱な休息は、何によっても乱されなかった。

一人だけはしかし、同じ休息に参加しなかった。それはブレーマーだった。今や彼には少なからず行く所があり、遠出や小さな旅行を計画していた。

普段、大層厳しかったヒーフラーは、彼を自由にさせ、黙って彼の一時的不在を許した。それどころか、不在に殆ど気付かないように見えた。それ程、ヒーフラー自身、熱に浮かれたように働いていた。そして自由な時間には、普段より更に大急ぎで姿を消し、山中の孤独を訪ねていた。

その時には、税務署は静寂そのものだったが、ただ時折、女の叱る声がこの不快な静寂を破った。

その時隣人たちは、ヒーフラー夫人が、彼女はその毒舌故に恐れられていたし、彼女の傲慢な夫を尻に敷く術すらもやってのけていたが----又しても機嫌が悪いことを知った。

それ故、彼女の夫は物笑いにされていたし、今や同情もされていた。というのも、彼は明らかに病気で、その事は一目見るだけで、彼の衰弱した姿、彼の青白い急激に年老いた顔付きで分かった。

ブレーマー、善良で正直なブレーマーも、彼に同情した。しかしそれにも拘わらず、彼は以前盲めっぽうによろよろと歩いた道を、間断なく先へ進んだ----そして今や彼は、目的を的確に捉えている意識で、いわば一直線に追跡した。

彼はマルテンスの家を、相変わらず重病で横たわっていた友人を、一度訪問していた。友は勿論話せなかったが、その妻があらゆる試問に喜んで応じた。これからブレーマーには次のことが分かった。第一に、全く邪推深くないマルテンスは、2番目の鍵を成程良く保管はしていたが、まだまだそれ程良い保管ではなかった。そこでずる賢い家人が、恐らく稀にしか使用されぬ化粧室から鍵を盗み、再びその場所に戻すことが出来ただろう。その為には、鍵泥棒はただ棚の単純な錠前と、全く同じように単純なドアの錠前を開けることが必要だった。

第二にブレーマーが聞き知ったのは、やっと一年前からこの地に姿を現わしていたロイス・ベルナウアーにとって、マルテンス夫人が貸していた小部屋を、それは彼女の娘が家を出てからだが、まさしく維持することが、特別に重要だったことである。

そして第三に明らかになったのは、あのロイスが復活祭の日曜日に初めて足の痛みを感じたこと。しかし彼はそれに対して何もしたがらなかった。いやいや、悪化を長く否定したので、終に復活祭の約2週間後、病臥する身となった。そこでマルテンス夫人は、彼に最早尋ねることなく、医者を呼びにやった。医者はすぐさま、今、生じている傷は、最悪の状態を気遣わしめると、説明したことである。

病気の状態で、あのロイスは実際落ち着かなかったし、一度は手紙を書き始めていたが、矢張り再びそれを燃やしたと言うことだった。

彼の死は怖ろしい死だった。死去する一時間前によく、不安に満ちた格闘の真っ直中で牧師を呼んでいたが、その時まで、頑固に牧師の訪問を断っていたと言うことだった。

* * * * *

その事をブレーマーは、友人の奥さんから聞き知っていた。彼にはそれで完全

すぎるほど十分だった。

今や既に多くの出発点や多くの脈絡を掌握している、彼のような者には、全体的悪事の仕組みを発見するのは、いずれにせよ望まれても好かった。疲れを知らず、彼は沈思黙考し研究した。後に、ブレーマーは少なからぬ質問を通じて、次のことを知った。つまり好男子の鉱山夫は、決して彼の地味な地位に留まらず、秘密に満ちた暗示的保護者、ロイスに対してある種の義務のあるパトロンの援助で、よそへ移住し、より上品な生活を始めることを計画していた。----そこで更に一つのヒントが展開された。

あの保護者はヒーフラーだった。そして高望みをするロイスの心に相応しい生活を作りあげて、彼によって、家族の平和のために強制されていたことである。とにかくヒーフラーがロイスの生存を生み出したのだから----そういうことも、休みなく探求するブレーマーは間もなく推測した。そして最後には、ロイスがどんな方法で目立たない傷を足に負ったのかも分かった。結局の所、余りに長く秘密にして治療されなかった傷のせいで、死に至らしめたことを。

ある夕方、即ちそのドクターが、白鳥屋の隅の小部屋で打ち明けたところでは、若し自分が時宜を得た時に呼ばれていれば、ロイスは死なずに済んだだろう。というのも、奇妙な方法で傷口に入り込んだ緑青は、その時それ程、破壊的な作用を及ぼす時間がなかっただろうから。

この話し合いの後間もなく、ブレーマーは彼の良く知り、彼に好意を抱く裁判所の人物の所へ出かけていた。その人物の許には、のっぼのペーターに発見された所有物が相変わらず保管されていたし、これ等は見せて貰えた。

そんなことから、ほこ槍の飾りは、緑青で化粧張りされていたことが明らかになった。

使者の手に発見された小さな木片も、ブレーマーは認めたし、勿論彼以外の誰もその事に思い至ることは出来なかったが、一日後、静かな朝の時刻に僅かな家々を、その近辺で、夜の短い闘いが行われていたはずだが、詳細に視察した後で----あの磨かれたイチイの木の小さな木片は、聖ヨハネ像の一部であることが分かった。その像は彼の隣人の家の傍、ドアのすぐ横の、壁の窪みに立っていた。

ヨハネ像の外袍の縁が欠けていたが、それを多分ペーターは、生命の不安の中、救い手と呼び寄せるべく、家の呼び鈴を掴んだのだった。

ブレーマーが正しい小路を進んで行った時、この老人には、ますます切迫しながら狭く、何も予感しないヒーフラーを取り巻く鎖の一つ一つが、互いに適合し合った。

何も予感せず！実際その通りだった。呪われた男は、犯罪を犯していた。私生児の息子を、密かな、しかしそれだけ一層激しい愛情に結び付いていた子供を助け、その性に合うような社会的地位を得させるためだった----彼には今や恐らく、この犯罪を犯したのは無駄だったことが分かっていた----しかし分かっていたのは、更に他の刑罰が彼を待ち受けていることだった。彼の心を苦しめ、彼の普段の鉄のように丈夫な肉体の力を、突如として破壊した怖ろしい拷問としての罰が。

ヒーフラーは相変わらず、完全に自由に、非難すべき点のない男として歩き回った。ただ人間嫌いの点は更に強まったように思われた。というのも、職場の仕事を終えるやいなや、今では全く静かな山々に急いだからである。

そして時折、彼に一人の男が付き従った。遠方から、慎重に、自分が見つからぬ巧妙さで。

追跡の過程でブレーマーは、ヒーフラーが大きな回り道をして墓地を訪れるのを認めた。町の向かい側に位置する丘を、彼は登って行った。丘のひんやりする大地には、苦しみに満ちた人生の、少なからぬ死者たちが休息していた。蜥蜴の素早さでブレーマーは、ヒーフラーを隠すのに役立っていた同じ茂みから、安全に滑り出た---ヒーフラーの背後から。そして彼の挙動を観察出来る位置を見つけた。

低い墓地の塀の傍で、呪われた男は立ち止まった。というのも、墓地に踏み入ることを彼は敢えてしなかった。

塀の縁に両腕を置きながら、彼は最も新しい墓をじっと見つめた。墓にはみすばらしい花輪が乗っていたが、しかしその頂には、眼を驚かす、美しい鉄十字架が聳えていた。

死者の母親がそれを建てたのだと、墓堀人は人々に言ったが、彼等は、かくも高価な墓の装飾品を、貧しい鋤夫が得たことを訝しく思った。

ロイス・ベルナウアーの母親が誰で、彼女は何処で暮らしているのか、誰も知らなかった。

今ヒーフラーは、その墓と十字架の小さな板の墓碑銘を、じっと見つめる。そして痙攣しながら、彼の両手を合わさる。彼の唇は震え、彼の眼は燃えるように輝く。

ブレーマーはその不幸な男から 10 歩足らずの藪に身を隠して立っている---この大きな、黙せる苦痛を目の当たりにして、心持ちが弱々しくなるのを感じる。そして彼はまさしく密かにヒーフラーに謝罪する。彼を心ない男、ただおのれ自身のために生きて愛している者と見做したことを。

ヒーフラーはそうではない。かくも深く悩み、黙しつつかくも悩むことの出来る者は、全く悪人ではないし、心の狭い男でもない。

この瞬間まで、ブレーマーは彼の上役を根本的に誤解していた。彼をまさしく普通の人間と見なし、ただ普通ならざる悪事を行ったと信じていた。今からは、彼についてより良く考えられる。というのも、父親の苦痛にある彼を目にしたのだから。

だがしかし、どれほど老人の心がそのせいで弱々しくなろうとも、矢張り彼の心は強いままだったし、平静だった---ブレーマーはすぐさま再び観察を続ける---ヒーフラーが墓地の塀から立ち去ると、彼はまるで影のように後を追う。

狭い森の谷が二人を迎える。

急ぎ足で、ますます大急ぎでヒーフラーは歩いて行く。

それはまるで彼が一人の散歩者ではなく、一定の目標を迫りかけているかのようだ。

そして急ぎ足で、ますます大急ぎで老ブレーマーは、万難を排しつつ彼について行く。

『行くがよい、行け---不幸な男よ』と、ブレーマーは考える。一方、彼はインディアンの狡猾さで上役について行く。『盗まれた金への道を示すがよい!』

森の谷は小さな、山に囲まれた平坦地へ広がっていた。そこは軽い霧に覆われている。山々の間は湿っている---そして秋には、霧は既に日没時に流れ出る。谷には最早黄昏が支配し、全平地には平和に満ちた静寂があった。この平地には木々の群れが生い茂り、野原も草地も平地に親しげな刻印を与え、小川の傍に延びている小さな村は、見た目の貧しさにも拘わらず、矢張りその住民たちは有能な、働き者の印象を与える。

ただ一軒の家、むしろ一軒の小屋、それは森の隅のすぐ傍に聳え立ち、他の家々から遠く離れ、頼もしいと言うより遙かに絵画的、また心地良いと言うより遙かにロマン的に見える。

青みを帯びた煙が、秋らしい効果を示しながら松の木の下を流れ、松の木の枝々からは、銀色の糸苔が釣り下がっている。しかしその煙突はひびが入り、半ばモルタルが剥げ落ちている。

向日葵と野生の芥子が、小屋の二つの窓の前で頷き合っている。しかしこれ等の窓は汚れで曇っている。そして厚い蜘蛛の巣の網が窓の隅に張っている。

一匹の立派な猫が、ドアの前に寝そべっている。しかしこのドアには弛んだ蝶番がぶら下がり、ドアの闕は穢いものでぎっしり詰まっている。

そして今、ヒーフラーがこの闕へ歩み入る。彼はこのみすばらしい、投げやりな環境の中では、全く上品そうに見える。

小屋の内部で、彼は一人の女を見つける。それは並外れた大女で、その色々な特徴は昔の美しさを物語っている。

金髪の、半ば灰色になった、すっかりもじゃもじゃの髪が、ほつれたスカーフの下に隠れている。彼女の全ての衣服は、酷く使い古された痕跡を示し、この上なく大層貧しい。その結果、首飾りの真珠は、まだすらりとしている首回りに掛けられているが、色とりどりの石を持つ、明るい耀きの金製留め金が、本当に奇妙なくらい、衣服と著しい対照をなしている。

その事はヒーフラーにも分かるに違いない。彼は女とその宝石類を長くじっと見つめ、表情はその時ますます暗くなる。

『後ろのドアは閉まっているのか?』と、彼は無愛想に尋ねる。

『分からない!』と、彼女は応じる。そしてのんびりした様子で、ヒーフラー

が入って来た時、口元へ運ぼうとしていたコーヒーカップを、ストーブ前の敷石に戻す。しかしながら彼女は恐らく、後ろへ通じるドアが閉まっていれば、又、この訪問客が彼女の小屋に留まる時には、それが良いのだと悟る。だから更なる命令を待たずに、彼女は短い暗い玄関を通って行き、周知のドアの掛け金を掛ける。

確かに----ドアは閉まっていた。あるいは----ドアはそうではなかったのか？彼女はただひょっとすると、一人の男が上辺だけそれを頑強に言い張ったが故に、言いなりにならなかったのか？

ベルナウアーの母親は、ドアは閉まっていると推測した。彼女は決して頭を悩ますことは好まなかった。彼女は怠惰で、ものぐさだった。

この大柄で、がっしりした女は----恐らく綺麗好きではなかったが----おめかしやお喋りや美食が好きだったのに引き替え、働くのを厭がった。今、彼女は少々寒気を感じたので、暖かい部屋へ急いで戻った。そこでは開いた竈の上で、心地良い火が燃えていた。アロイシア・ベルナウアーは、ドアを詳細に調べることを考えなかった----彼女はただ居心地の良さだけを考えて。そして彼女の客人同様、次のことを予感しなかった。----彼女の足を引き摺る歩みが、玄関の三和土で黙するやいなや----小さくて、敏捷な小男が、夕暮れの影から、玄関の更にもっと深い影の中へ滑り込み、音を立てず稲妻の素早さで、屋根裏部屋へ昇る階段の隅に身をちぢ籠めたことを。

間もなく、暖かい柔らかな物体が彼の傍に擦り寄った。そして緑の輝きが暗闇を通ってきらめいた。

ベルナウアーの母の赤い猫が来ていた。そして女を滅ぼす男に気持ちよく、ごろごろ喉を鳴らしながら相手をした。

その小さな家の、たった一つの内部の部屋では、騒がしくなっていた。

急ぎ足でヒーフラーは、その部屋の中を行ったり来たりした。今、彼は立ちどまる。

『よくもまあ、お前は鎖を買うことが出来たもんだ？』と、彼は女を叱り飛ばした。

彼女は大きな音を立てて、コーヒーを啜り飲んだ。

『それがあなたに何の関わりがありますか？』と、彼女は終に応答した。

『私は、お金を少しでも支出することをお前に禁じただろう。』

『そんなこと、私にはどうだっていいのよ。』

『しかし私には大変気になる。村の誰かが鎖を既に見ただろう？』

『誰が一体、私の所へ来るかしら？』

『誰から、お前はそれを買ったのか？』

『見知らぬ小売人からよ。向こうのキルヒ村の。恐れなくていいのよ。皆が搜索している新しいお金を、ここの村で支出するほど、私は馬鹿じゃないのよ。』

『その鎖を、お前は取り外しなさい。』

『それはお断りだわ。』

『お前は、それをやるんだ----それには、何がかかっているか、考えて見なさい---- ----』

『あなたの名誉が』と、彼女は嘲笑した。

『私の生命が』と、彼は抑揚のない声で言い返した。そこで彼女は、今矢張りそれに少々驚いて言った。『事はもうそれ程進んでいるの？彼等は、あなたに嫌疑を掛けているの？』

『私は恐れている----ある者が疑いを抱いたのだ。』

『誰が？』

『ブレーマー。』

『あのみじめな雄鶏が！あなたたち、あなたとあのロイスが、いつもからかっていた彼奴が？』

『彼奴だ。』

『それであなたは、彼奴を恐れているの？』

『彼奴を、皆すべての者を、風の中で聞き耳を立てるどの新聞をも。』

彼女は声高に笑った。『あなたはいつも、どっちつかずの人だった』と、彼女は嘲った。『あなたは私に恥を搔かせた。だってあなたは、大学出の人間として貧しい百姓の女と決して結婚しなかった。それにあなたの妻を 25 年間馬鹿にしたのだから。というのも、彼女は自分のお金をやはり、私たち二人、私と私のロイスのために引き渡さねばならなかった。だって私はそれ程愚かではなかったから、不自由することも、自分を苦しめることも望まなかった。あなたが富の中に安住していた間に。あなたは私たちと手を切る勇気もなかったし、私たちを助ける勇気もなかった。家ではあなたは、あなたの妻の奴隷だったし、ここではあなたの罪業の奴隷だった。そして今、あなたが私たちから永遠に自由になれる物、最終的な大きな物を私たちが要求した時、今現在、事の半分は失敗したのだから---- ---- ----』

『半分は失敗した』と、ヒーフラーは絶望に満ちた調子で叫び声を上げた。『犯罪の半分は失敗したと、お前は言うのか。我々の子供を滅ぼしてしまった犯行を。おお、お前は悪人だ。私が知っていたよりずっと悪人だ。----怖ろしい提案をお前にさせたものは、母性愛のためだと、私は考えた----勿論墮落した母性愛だが----しかしそれは決してそうではなかった----というのも今日は、この鎖がお前の首できらめいている。私がロイスを失って悲しんでいるのと同様に、お前が彼を悲

しんでいるとするならばだが？お前が以前私に語ったように、彼の為じゃなく、お前の為に、私はこの盗みに同意しなければならなかった。』

『それで、もし事がそうなら？盗みは盗みでしょう。もしその行為があなただと立証されれば、事は同じ一つの事よ。あなたがロイスの為か、あるいは私の為に犯したかどうかは。』

『同じ一つだ！』と、ヒーフラーはうめき声を上げた。『お前は正しい！』

『それに私は、あなたのように狼狽えることもしないわ。まだ今晚中に、私はこの地方を去りたいわ。』

『金を持って？』

『勿論金を持って。あなたには矢張り何と言っても、差し障りがあるかも知れない----そしてあのロイスは----あのロイスは、確かに彼の分け前を頂きます。』

『あの十字架は----この罪業の金で買った』と、ヒーフラーは気が狂った者のように笑った。

『どっちだって、同じ一つの事です。だからいけないと言うこともないわ。だけど無益な話はやめましょう。あなたは家へ帰らなければならない。私も一時間以内にここを離れなければならない。だってキルヒ村を通る列車が来るのよ。----本当に、あなたの不安が私に感染したわ。お行きなさい----私も出かけられるように。神様があなたをお守り下さいますように、さようなら！』

『神様だって！まるで我々二人がまだ、何か神様と関係しているみたいだ！』

『お行きなさい』と、彼女は彼を怒鳴りつけた----そして彼は去った。別れの眼差しを見せず、言葉もなく握手もせずに。

彼等はまさしく完全にお互い終わっていた。この二人、かつて愛が一つに結びつけていた二人は。

重々しい足取りで、彼は部屋を立ち去ったが、玄関で立ち止まった。

『お前は矢張り間違いなく、今日のうちに出発するんだ----そして我々の不利になる物はすべて、一緒に持っていくこと。考えて見ろ、お前も裁判所を恐れなければならぬ。』

『お行きなさい！』と、彼女は苛つきながら、彼の背後から大声を上げた。そして嘲笑するように付け加えた。『それに恐れる必要はないわ。裁判所は私たちに、何の害も加えることは出来ないでしょう。私は永遠にこの地方から姿を消すわ。それであなたも安全よ。』

『安全！安全だ！まるで私はもう裁かれることはないみたいに』と、呪われた男は呟き、それから暗闇の中へ蹣跚めき出る。

『臆病者！』と、ベルナウアーの母は大声を上げる。それが、彼女が男の為に述べる唯一の別れの言葉だ。その男を、彼女は女たらしだと言いふらし、その為

に男の人生を壊滅させたのだ。

しかし彼女も今や、怖ろしい動揺を感じている。ヒーフラーが、疑惑が彼に向けられ始めていると彼女に言って以来、床が彼女の足下で燃えている、。

彼はそれを思い込んでいるだけだ。というのも、ブレーマーはどんな視線でも、どんな表情でも、自分の秘密を漏らしはしなかった。そして確かに他の誰も、ヒーフラーと交際しながら、彼が罪人だなどと考える者はいない。

外の松の木が夜風でざわめく。雄猫がうなり声を上げる。そして内側の小部屋で、ベルナウアーの母ががたがた音を立てる。それ以外はすべて静かだ、静かすぎて、老人は階段の隅で、自分の心臓が動悸を打つのを聞くし、更に何か、大容量で、一枚の毛織物の中へ揺さぶり入れられる銀貨の響きを耳にする。

その時、彼はゆっくりと立ち上がる。上衣のポケットに手を突っ込み、緩やかにその部屋のドアへ向かう。その中ではベルナウアーの母が、彼に半分だけ背を向けて、机の傍に立っている。彼女は何も見ないし、聞かない。お金の輝きと響き以外は。念入りにくるんで結び合わせながら、彼女は呟く。『袋を燃やした私は、お馬鹿さんだわ。まだ 50 グルデンなくす事もないわ----もし、このぼろぼろに朽ちた布きれが、破れさえしなければ。』

『それは破れないでしょう、ベルナウアーのお母さん。私たちはすべてその金を、そこにある担い容器に移しましょう。』

全く落ち着いて、小さな痩せた男、ドアの闕に立っている男はそう言う。そこで吃驚して、殆ど石のように強ばった顔が男に向けられる。

二人は恐らく一分間、身動きせず、お互い向かい合って立ち続ける----彼等は奇妙な光景を差し出す。彼はただ鈍い光に照らされて、まるで地の神グノムのように、しかし鉄製のグノムのように見える。そして彼女は、竈の鉄板で高く燃え上がる赤い火の光に殆ど赤熱されて、もじゃもじゃの髪、ずたずたに引き裂かれた衣服、それに怒りで歪んだ表情を持つ魔女、極めて偉大な魔法使いに屈服した魔女に似ている。だがしかし、その魔術は長くは続かない。

復讐の女神のように、彼女はがっくりと倒れた姿勢から跳ね上がると、絶えざる怒りを咆哮しながらブレーマーに向かって行く----しかし彼は落ち着いて腕を上げて言う。『ベルナウアーのお母さん、落ち着いて、そこに留まるように。今やあなたはお分かりでしょう。さもないとわたしは、あなたを撃たねばならないことになるのが。』

それは効き目がある。再び女は自分の中へくず折れる。今やブレーマーは、彼女を目の合図で支配出来る。あるいはピストルの銃身で彼女を支配しているのか？一つだけは確かだ。ベルナウアーの母は一步一步、彼の前から後退りして、彼が望んでいた事だが、終にベンチの上へ沈み込む。まさしく豊富に物が載せられたテーブルの背後、壁際に広がるベンチへ。

まるで猛獣使いが、調教したい野獣を眺めるように、小さな、年老いたブレーマーは、その大柄で強壮な女を眺める。

『両手をテーブルの上に置きなさい----それから決して動かないように』と、

彼は言う。すると彼女は、彼の命じる通りに振る舞う。

雄猫も小部屋へ入ってきた----猫は心地良さそうに、女の腕に頭をこすり付ける。ブレーマーは小部屋へゆっくり侵入した時、囲炉裏の横にあった小さな担い容器と一緒に持って来たが、彼はそれをテーブルの横に置く。左手で、右手は勿論、銃を発射出来る準備をしているが、というのも、ブレーマーには今や生命に関わる問題だというのが分かっている----だから左手で、彼は骨を折りながら、ふたつのまだ損なわれていない、まだ鉛の封印のある金袋を一つ又一つと担い容器に抱え上げる。それからお金の束を付け足して、その後、ポケットの中で鉛筆と一枚の紙を捜す。

彼はそれだけを見つめる。その紙には奇妙なスケッチが描かれている----それが何の役に立つのか？今やそれは不必要になった。そんな訳で、彼は彼女に鉛筆と紙の両方を押し付ける。

『あなたは書く事が出来ますか？』と、彼は尋ねる。彼女は頷く。

『それじゃメモして下さい。十字架はいくらだったか、それにあなたが、その首に掛けている装飾品は。それに又----あなたがその他更に 6000 グルデンからあなたの為に支出した物を。』

ベルナウアーの母は動かない。彼は暫く待つ。というのも、彼女の体全体が震えているのを、彼は見ているから。

『書いて下さい、ベルナウアーのお母さん。きちんとしなくてははいけません』と、彼は柔らかに言う。

『わたしはそれはしません！』と、彼女は反抗的に声を絞り出すように言う。

『それなら私は発砲する----あんたを狙ってじゃなく、ただ空中に----するとあなたの小屋は間もなく、人々でいっぱいになるでしょう----それからあなたは裁判所に出頭する----あなたが私の命令の意に従うなら、その時は少なくとも、あなたの自由は守られる----というのも、いいですか、ベルナウアーのお母さん。私にはただ、このお金が再び金庫に戻る事が問題なのです。----あなたは逃げたい----それは私の上役にも----私は即ち例のブレーマーだが----より良い事でしょう。』

『あのブレーマー！』と、彼女は驚きに満ちて彼を遮る。そして震える両手で鉛筆と紙を掴む。

あの『歎きの雄鶏』は、今や完全に彼女を征服した。ぎこちない文字で、ゆっくりと又苦労しつつ自分の考えを探し集めながら、彼女は要求されたものをメモする。時折、彼女は躊躇う。しかしながら探るように眼を上げると、自分の前の銃身を見つめる。だから何度も何度も彼女は書き続け、それから紙切れを彼の方に押しやるが、しかし彼はそれを受け取らない。

『紙を二つに引き裂いて、空欄の半分に、あなたが私にお金の残りを渡した事を書きなさい』と、彼は命令する。

彼女はそれをする。そして今や、彼はその紙切れに手を延ばす。『それじゃ私

はサインで、あなたにその事を保証したい。』

彼はそれを素早く行う----右手を再び自由に使えるように。それから彼は奇妙な領収書を彼女に押しやり、完全に身動きしない事を命じ、重い担い容器を背中に担ぐ。そしてベルナウアーの母を常に鋭くじっと見つめながら、後ろざまに小部屋を出て行く。

今や彼は明るい星空の下に立つ。山々の上には既に月の光が現われている。ブレーマーは深呼吸する。そう、近くの家まではほんの5分程度だ。急ぎ足で更に歩を進めながら、間もなく彼は村の真ん中に立っている。

そこかしこで、まだ窓が明るい。村の酒場の小部屋には、まだ何人かの百姓たちが座っている。

ブレーマーは勿論、背中に担い容器を担いだ都会風の服装では、彼等の許へ歩み入る事は出来ない。そこで彼は樹々の影の中で、主人がビールの地下蔵へ行く為、中庭へ出て来るまで待つ。その地下蔵は、ブレーマーが以前、酒場を訪ねた時から知っているように、家の外にある。

終に酒場の主人が出て来る。ブレーマーは小声で彼に呼びかける。間もなく主人は、自分が誰と関わり合っているのか、彼が何を切に望んでいるのかが分かる。

半時間後、一台の車が村からやって来る。一人のずんぐりした若者が車を運転している。後部座席にブレーマーと主人が座る。

二人の間には、高価な中味の入った担い容器が立てかけられている。

* * * * *

次の朝、ブレーマーはいつもの時間より早く家を出る。彼は青白く、本当に疲れたように見える。にもかかわらず、彼は申し分のない人間の印象を与える。それ程落ち着き、それ程断固として彼は歩み出て来る。そして眼の前を見つめる。

彼は職場の建物に入っていく。彼の後ろから二人の人間が歩いて行く。その若い方は担い容器を担いでいる。ブレーマーは厳かに職場の上役の許に出頭する。ヒーフラーはすぐさま彼を迎える。彼も青白く、明らかに緊張しているが、しかし平静には見えない。

『何をあなたはお望みですか？こんなに早く----仕事以外ですか？』

ヒーフラーは柔らかく尋ねる。そしてとても不思議そうに、大いに、大いに密かな不安の下で震えながら。

ブレーマーの心は痛む。しかし『すでに裁かれて』いる男、この内面的には全く無に帰せしめられた男を眼の前にして----彼は喜ばしい、とても喜ばしい。彼は自分の暗示に従った事、まず最初裁判所へ行かず、彼の発見を前以て『職務的に』告知すべく、ここへやって来た事が。

『私は職務以外のことで来てはいません、上役殿』と、彼は真面目に言い、二人の男たちを指し示す。二人は受付室に立っている。『昨晚、私はお金を再び発

見することに成功しました。復活祭の土曜日の夜、お金が盗まれた時、あの哀れなペーターは彼の命を投げ出さねばなりませんでした。この金は、大した不足はありませんが、隠して居た女から取り戻し、再び持って来ています。あなたはきっと、今何が関係しているのか御存知でしょう。裁判所の人々に、私は使いの者を送りましたが、彼等は今にも到着するでしょう。』

青ざめた顔付きになり、どんよりした眼差しと絶望を現わしながら、ヒーフラーは、彼にとっては重要極まる、簡潔に述べられた報告に耳を傾けた。彼は今や、ブレーマーがすべてを発見したことが分かった。又この長くじっと待っている男が、証明出来ないものは何もないこと----だから刑務所を遁れる救済は不可能であること、つまり死を遁れる救済は全くあり得ぬ事が----というのも、彼は確かに刑務所よりも死を、相変わらず優先しているのだから。

より青白くなり、落ち着きなくあちらこちらへ小刻みに歩きながら、廊下の方へ聞き耳を立てて、ブレーマーは彼の上役へ視線をやる。そして今、今や彼は上役の腕に手を置いて、小声で性急に言い立てる。『私はこんなにも空想的な行動をしたのは、無駄だったのでしょうか？----一人で、証拠を探し廻る苦労の多い仕事を、自ら引き受けたのは---習慣に反して、また自分の責任で行動したのは？一方で、私はベルナウアーの母親を逃亡させ、あなたには相応しい時期に、更にすべての知らせを寄こしたのは？私はあなたを見誤ったのですか？』

ブレーマーがこれ等の言葉によって、それでもなお彼に好意を抱いていた事を示すと、ヒーフラーの鈍い目が仄かに光り始める。すると彼は老人の手を激しく掴み、こう囁きかける。『いいえ、ブレーマーさん、あなたは見誤ってはいません。----死ぬことは、私には救済です。有難う、有難う。今日あなたはかくも多くのことを、私の為にしてくれました。』

まだ荒々しい興奮に満ちた、ある眼差し、ある微笑を見せて、ヒーフラーは彼の寝室へ姿を消した。

外では足音が響いた。急いで受付室のドアが開けられる。多くの人々が入って来る。

彼等の一人は予審判事で、彼は今までこの重要事件を主宰してきたが、効果を出せなかった----彼は急ぎ足でブレーマーに向かう。

『何です、あなたが報告すべきことは何ですか？』

『お金はそこにあります。』

『それで盗っ人は、おやおや、盗っ人が誰なのか、あなたは更に多くを御存じなんですね？』

一発の銃声が家の中を響き渡る。

ブレーマーは満足げに頷く。しかしそれからやはり、彼は額の汗を拭き取り、腰を下ろさねばならない。人々は驚き、胸騒ぎがしてお互いを見つめ合う。

『盗っ人は誰ですか？』と、予審判事はもう一度尋ねる。そこでブレーマーは涙に濡れた目でドアを見やる。そのドアの背後に以前、ヒーフラーは姿を消して

いたが、そしてこう言う。『あそこの内側に、あなたは盗っ人の死体を見つけることが出来ます。』

* * * * *

再び数日が過ぎ去った。

ブレーマーは初めて、友人のマルテンスと連れだって、再び『白鳥屋』に姿を現わす。

二人は今や、御祝いされる人物である。

だが矢張り人々は、マルテンスの実直さを一秒たりとも疑わなかったことを、彼に示さねばならない。それに彼は今や、税務署・監督官でもあり、何と云っても重要な人物なのだ。

そしてブレーマーは----今まさしく、彼は当日の立役者である。

白鳥屋の主人は、病いから回復した新しい監督官の為に、小さな催しを企画した。そこでマルテンスは上席に、彼の右側にはブレーマーが座っている。そして今初めて、一体どんな風にしてどうやって、彼が、ヒーフラーの罪業を証する、覆しようのないあらゆる証拠物件に到ったかを、公に語らねばならない。

そしてその場で、テーブル仲間たちはそもそもすべての発見が----一本の糸にかかっていた----ことを聞き知るのである。一本の黄色い、きらめく絹の糸。ヒーフラーが家でいつも着ていた寝間着の房にあるような糸。それは十分すぎるほどあったが、そのうちの一本が、盗まれた金庫の内部の張り出しに付着していたことを----そして仲間たちは、それがすぐさまブレーマーの注意を引いたことも聞き知る。この糸を見たことが、どれほどの興奮をヒーフラーに呼び起こしたかを、そこで彼は自分の発見物を、直ちに自分の方へ取り退ける様を見せたかを。

これがブレーマーの静かな考察の出発点だった。

真面目に黙ったままマルテンスは、活発なくらい興奮したテーブル仲間たちが繰り出す、異議や質問を聞いている。そしてただブレーマーが答える時だけ、誇らしく嬉しそうに友人を眺める----友は----マルテンスを疑いながらも----その事を彼はとっくに知っていたが----それ程休みなく働き、探求していた。少なくともこの罪業から人々に対して、彼を解放する為に。

しかし別の罪、あるいはより良く言えば、この罪への記憶が、相変わらずマルテンスを滅入らせている。彼は再三再四、あの時間を考えない訳にいかない。その時彼は----復活祭の月曜日だった----両手を組み合わせて、義理の息子の前に立っていた。ハンスを救ってくれと、彼に嘆願しながら。そして何度となく、大きなすらりとした男の『義理の父親が、私は助けることが出来ません』と、言うのを聞く。『私に任されている孤児援助金から、この 800 グルデンを持ち出すことになるでしょう。』----そして弟ハンスを、殆ど偶像崇拝的に愛している娘の啜り泣きを聞く。それから突然、娘は夫の前に倒れ込み、弟の救済を懇願する----ハンスはそれで救済された----孤児たちのお金で。それから義理の息子は、山間の町でその間、何が起きているかを更に知ることもなく、一度そこへやって来た。マルテンス家の人達に、ハンスが義理の兄に宛てていた、火のような感謝の手紙

を見せる為に----そしてそれから----それから彼は逃げるように立ち去った----というのも、色んな事件が恐ろしく併発していたので、マルテンスは義理の息子と一緒に、最も具合の悪い状況に陥っていたのだ。だから万一の見張りを避けること、急ぎ足で再び故郷への道を辿ること、そしてあらゆる更なる交際を憚ることが重要だった。

しかし間もなく、これ等は最早全く不必要だった。ハンスは数日後、義理の兄に 800 グルデンを送り返していた。彼からその金を取り上げた男は、いかさま賭博師として、裁判所に引き渡されていた。

山のように大きな心配事が、家族から取り除かれていた。マルテンスだけは、物事の幸運な変化について何も知っていなかった。彼は当時まだ、ベールで覆われた精神のまま、痛々しい状態で伏せていた。

ブレーマーは、マルテンスの妻から半分は説明を受けていた。臆病そうな、多くの涙で中断された説明だったが。

彼女は彼を、誰か他の者より高く評価していた。というのも、彼女は繊細な感情で、彼の誠実な魂を認識していたし、彼が沈黙出来ること、沈黙し、元気づけ、助けてくれることを知っていたのだから。そして実際、彼は助けた。

ある日、彼は友人のベッドの傍に座り、こう言うことが出来た。『あなたがその為に苦しんで居るのではないかと心配で、本当の犯人を見つけようと骨を折りました。今や犯人は発見され、あなたは潔白でここにいます。』

『私はそれに価しない程度に、潔白に過ぎません』と、マルテンスは溜息をつきながら答えざるを得なかった。

『あなたはそれを息子の為になさったわ』と、彼の妻が彼を慰めて言った。

『それでヒーフラーは？』と、二人の男たちは同時に彼女に応じた----そこで彼女は沈黙し、深く同情しながら、その不幸な男のことを考えた。この男は勿論、息子の為に更に重い罪を犯し、再び何も償うことを望まなかったし、他人を自分の為に苦しませようと望んだ----彼はしかし又、恐ろしい厳罰を蒙らされた。

そのことを、あの上席での食事の時、マルテンスは考えた----そしてそれ故に、彼はその際、妙に黙っていた。

* * * * *

ヒーフラー夫人はとっくに山間の町を去っていた。にもかかわらず、見知らぬ手によって、死者の記念日に、新しい十字架がヒーフラーの墓に置かれていた。墓堀人だけは、既に早朝、マルテンスとその妻が、そこでお祈りをしていたことを知っていた。ロイス・ベルナウアーの墓はしかし、誰からも花を贈られなかった----彼は確かに、彼の母以外の誰もこの広い世界に持つてはいなかった----そのことは皆知っていた----彼の母は殆どいつものように、小さな家の閤に座って、虚空をじっと見つめていた。

彼女の衣服は以前より更にだらしなかった。そしてそれ故、彼女が好んで指を通すきらめく首飾りは、益々人目を引いた。

彼女はしばしば、小部屋の内部には多くの銀の袋があること、そして息子に更に多くの十字架を買ってやれることを語った。しかしながら恐らく彼女には、息子が一つだけで既に満足しているのが分かっているとも述べた。

時折、一人の子供が忍び寄ってきて、白痴染みた女をからかう。また時折、一人の情け深い百姓女が来る。そして彼女に小さなカップのコーヒーを持ってくる。

裁判所は、彼女に関しては、ほんのちょっと取り調べただけだった。ヒーフラーに関するのと同じくちょっとだけ。狂気と死に向き合っては、そう確かに、人間的正義も力がないのである。